

# 言語島について

新田哲夫（金沢大学）

## 1. 言語島とは

「言語島」（「言語の島」）とは、ある地域の言語（方言）が、周りのものとは著しく異なる特徴をもつために、地理的には陸続きであっても、言語の特徴からすれば、ちょうど絶海の孤島のように見える地域をいう。日本本土では、山形県東田川郡朝日村大島（現鶴岡市）、新潟県岩船郡朝日村奥三面、長野県下水内郡栄村秋山郷、山梨県南巨摩郡早川町奈良田、静岡県阿部郡井川（現静岡市葵区）、奈良県吉野郡奥吉野、東京都八丈島（これは実際に島であるが）などが「言語島」に数えられている（末尾にある図1）。いずれも昔は交通の便がしごく悪く、「秘境」といわれたところである。人の行き来の少ない孤立した地域が、長い年月を経て独自の特徴をもつに至ったものである。

「言語島」の様相を呈するものに、他には移住によって生じるものがある。石川県では輪島市海士が北九州からの移住民によってもたらされた方言の特徴を備えており、周囲の輪島市方言と多くの点で異なっている（岩井隆盛 1955）。移住によって生じた「言語島」は、上記のような「秘境」という自然条件を備えていないことが多い。それでも孤立した状態を保っているのは、婚姻関係がその集落に限定されていることや、地域の人々が同種の職業に関係し、強いアイデンティティをもつことなど、社会的な要因が強く働く場合が多い。ここでは言語変化の観点から、厳しい自然条件のもとに発達した「言語島」を扱う。

## 2. 言語島の一般性格

一般に言語島がもつ独特の特徴には、周囲の方言では失われた古い特徴が残ったものと、その地域で独自の発達を遂げたものの両方がある。

特に前者は中央語（京都・奈良）を中心とした日本語史を考えるさいの重要な手がかりになる。日本語史の研究者は、様々な時代の古い文献のほかに、方言の中にその「古態性」を見いだして、資料の一つとして用いることが多い。ある方言で保存された古い特徴は、生きた資料として文献だけでは分からなかった部分を補うことがある。

後者は言語変化にはどんなタイプがあるかを見極めるのに役に立つ。孤立した方言が独自の変化を遂げたことで、必ずしも中央語の変化が必然的な変化ではなかったことが確かめられる。

## 3. 言語島の特徴

この発表では、言語島と言われる石川県白峰方言、長野県秋山郷方言、東京都八丈島方



ta:-mo mjo:zu hadake-no kusa-mo torozu isogasi-koccja.

《田も見よう、畑の草も取ろうで、忙しいことだ》

(9) アシタワ 晴リョーズ。ヨカッタニャー。

asita-wa harjo:zu, jokat-ta-nja:.

《明日は晴れるだろう。よかったねえ。》

白峰のウズは文中で多く現れる。山内洋一郎（1964:139）が指摘する、中世の文献に見られる性質、すなわち、「ウズは発言の中途に多く見られる。前文から後文へと対比し添加し展開する文脈の中に位置する」という考察と一致する。

特徴(s3)も古いものである。ヤル・クレルの対立が生じたのは新しい。こうした人称による制限がないのは日本列島の両端に分かれて分布する。白峰は対立のある地域と無い地域の境界付近に位置する。特徴(s4)については後述する。

特徴(s5)はおそらく奈良時代用いられた1人称ア（レ）に起源をもつと考えられる。アレガコトとは「自分のこと」の意味で、1人称の名詞が再帰名詞として用いられるようになった（アレガのガは所有を表す助詞である）。特徴(s6)の接尾辞メについても後述する。

### 3.2 長野県秋山郷方言

長野県秋山郷は長野県の北部の山村である。冬は豪雪が道路をふさぎ人の往来を遮断する。以下にこの方言の特徴の一部をあげる（馬瀬良雄編 1982）。

- |                 |   |
|-----------------|---|
| (a1) 融合母音（開合）   | to:ɕji 《湯治》(au > ɔ:), to:ɕji 《冬至》(ou > o:)                  |
| (a2) 推量・意志のウズ   | kako:zu (< kaka-uzu) 《書こう》、mjo:zu (< mju:zu < mi-uzu) 《見よう》 |
| (a3) 終止形と連体形の区別 | tatu 《立つ》、tato-doci 《立つとき》                                  |
| (a4) 形容詞連体形のケ   | ta:kæ: 《高い》、ta:kake jama 《高い山》                              |
| (a5) 形容詞語幹の長母音  | ta:kæ: 《高い》、ko:re: 《黒い》                                     |

特徴(a1)について。母音連続 au と ou から生じた長母音は、現代語では区別のない「オー」の長音になっている。これらが融合した後しばらくは、ɔ:と o:で区別があったとされる。(a1)はその対立を保存していることを示す。この特徴は新潟県中越や佐渡地方にもあり、秋山郷はそれらと地理的に連続していると見なされる。

特徴(a2)は白峰方言の(s2)と同じ。この方言では母音の融合の在り方(a1)が関係する。高年層が用いたという報告があり、現在ではおそらく失われた特徴である。

特徴(a3)、(a4)は八丈島方言と共通である。古い東国の特徴を受け継いでいると言われている。以下(6)、(7)は万葉集（7～8世紀ごろ）東歌の例である。

- (6) <sup>u<sub>pe</sub>-ko<sub>na</sub>-<sub>pa</sub></sup> 宇倍児奈波 <sup>wa<sub>nu</sub>-<sub>ni</sub> ko<sub>pu</sub>-<sub>na</sub>mo</sup> 和奴爾故布奈毛 <sup>ta<sub>to</sub>-lu<sub>ku</sub>-<sub>no</sub></sup> 多刀都久能 <sup>nu<sub>ka</sub>na<sub>pe</sub> yu<sub>ke</sub>ba</sup> 奴賀奈敵由家婆 <sup>ko<sub>pu</sub>si<sub>ka</sub>ru-<sub>na</sub>mo</sup> 故布思可流奈母  
うべ児なは 吾に恋ふなも 立と月の <sup>たが</sup>流なへ行けば 恋ふしかるなも  
(巻 14・3476)
- (7) <sup>ko<sub>sug</sub>ero-<sub>no</sub></sup> 古須氣呂乃 <sup>u<sub>ra</sub>hu<sub>ku</sub> ka<sub>ze</sub>-<sub>no</sub></sup> 宇良布久可是能 <sup>a<sub>d</sub>o<sub>sus</sub>u-<sub>ka</sub></sup> 安騰須酒香 <sup>ka<sub>na</sub>si<sub>ke</sub>ko<sub>ro</sub>-<sub>wo</sub></sup> 可奈之家児呂乎 <sup>o<sub>m</sub>o<sub>pi</sub>su<sub>go</sub>sa-<sub>mu</sub></sup> 於毛比須吾左牟  
小菅ろの 浦吹く風の あどすすか 愛しけ児ろを 思い過さむ (巻 14・3564)

特徴(a5)は、白峰方言の(s4)と共通である。この特徴は、新潟県北半分、大分県北東部、島根県隠岐地方に離れて分布する。秋山郷と白峰という離れた言語島での一致は古い日本語の特徴をそれぞれが受け継いだ可能性を示す(新田 2007)。こうした母音の長短に関する情報は文献では得られない。方言の情報だけが頼りである。

### 3.3 東京都八丈島方言

八丈島は伊豆諸島の一つの島で東京から約 400km 離れた沖合にある。八丈島、八丈小島(現在は無人島)、青ヶ島で一つの方言圏をなす。八丈島方言は東西方言のうち、東の方言の一派でありながら、本土の関東方言と大きく異なり、他の伊豆諸島の方言とも一線を画す。

- (h1) 否定形式ンナカ kaki-Nnaka 《書かない》、oki-Nnaka 《起きない》  
(h2) 推量の形式ノーワ kaku-no:wa 《書くだろう》、cf. 青ヶ島方言 kaku-nauwa 《書くだろう》  
(h3) 終止形と連体形の区別 tatu 《立つ》、tato-toki 《立つとき》  
(h4) 形容詞連体形のケ taka-kja 《高い》、taka-ke jama 《高い山》  
(h5) 人称詞ア a-ga iko-wa 《私が行く》  
(h6) 生き物の名詞につく接辞メ usime 《牛》、inume 《犬》、hja:me 《蠅》

特徴(h1)は八丈島方言で独自に発達したものであろう(金田 2001、大島 1984)。大島(1984:264)によれば、(7)の変化を経たという。

- (7) naku-aro-wa > nakarowa > nakara > naka 《～ない》この naka が後部に付く。  
kaki no naka > kakiNnaka 《書き+の+ない》

特徴(h2)のノーワのノーは奈良時代に用いられた東国方言の推量の助動詞「なも・なむ」を受け継いだものという(大島 1984:266)。

- (8) <sup>u<sub>pe</sub>-ko<sub>na</sub>-<sub>pa</sub></sup> 宇倍児奈波 <sup>wa<sub>nu</sub>-<sub>ni</sub> ko<sub>pu</sub>na<sub>mo</sub></sup> 和奴爾故布奈毛 <sup>ta<sub>to</sub>-lu<sub>ku</sub>-<sub>no</sub></sup> 多刀都久能 <sup>nu<sub>ka</sub>na<sub>pe</sub> yu<sub>ke</sub>ba</sup> 奴賀奈敵由家婆 <sup>ko<sub>pu</sub>si<sub>ka</sub>ru<sub>na</sub>mo</sup> 故布思可流奈母

うべ児なは 吾に恋ふなも 立と月の 流なへ行けば 恋ふしかるなも

(巻 14・3476) (=6)

- (9) <sup>tatibana-no</sup> 多知婆奈乃 <sup>koba-no hanari-ga</sup> 古婆乃波奈里我 <sup>omopu-namu</sup> 於毛布奈牟 <sup>kokoroutukusi</sup> 己許呂宇都久思 <sup>ideare-paikana</sup> 伊弓安礼波伊可奈  
橋の 古婆の放髪が 思ふなむ 心愛し いで吾は行かな (巻 14・3496)

(h2)では八丈島方言の一つである青ヶ島方言の例 *kaki-nauwa* もあげたが、青ヶ島方言の方が、古い形をよく保存している。

特徴(h3)、(h4)は秋山郷方言と共通である。東国方言の古い特徴の残存である。特徴(h5)は八丈島の最も一般的な1人称として用いられる。

(h6)は白峰方言の(s6)と同じである。北陸近辺では白峰の他に福井県嶺北地方と岐阜県揖斐川上流部、離れて茨城・栃木・福島に見られる。この分布に関して山田達也(1984)では、岐阜県を含めた北陸方面と八丈島を含めた関東方面についての「メ」の発生は別々に起こったもので、連続した一つの分布域が存在したとの考えについては否定的である。発表者は、連続した分布の存在についてははっきりしないが、北陸と関東や八丈島の例はいずれも同じ「相手を罵る、貶めるメ」から発生し、「動物一般に付く接尾辞」まで同様の発展を遂げたが、その後、独自の道を辿ったと考える。

#### 4. まとめ

以下、表1にこれまで取り上げた言語島の方言とその特徴の現れを一覧表にした。それぞれの特徴が、古い特徴を保存しているものか、あるいは独自の発展を遂げたものか、決めるのが難しいものがある。

表1 言語島の特徴

	文献	石川県白峰	長野県秋山郷	東京都八丈島
(a) 母音融合(開合)	中央語中世	—	+	—
(b) マ行バ行ウ音便	中央語中世	+	—	—
(c) 推量のウズ	中央語中世	+	+	—
(d) 形容詞語幹の長音	なし	+	+	—
(e) 終止・連体の区別	東歌上代	—	+	+
(f) 形容詞連体形ケ	東歌上代	—	+	+
(g) 否定形式ンナカ	なし	—	—	+
(h) 推量形式ノーワ	なし	—	—	+
(i) 人称詞ア	中央語上代	+	—	+
(j) 生き物名のメ	なし	+	—	+

中央語の文献に現れる特徴は、言語島で保存したものであることは明らかである。平安時代以降の中央語はいわば日本語のうちでも西の言語である。(a)(b)(c)は西の言語の特徴を受け継ぎ保存したものである。(e)(f)は東の言語の古い姿を残したと言える。すなわち西の言語の強い影響を受ける前の特徴である。(g)(h)は八丈島方言（あるいは伊豆諸島方言）で発展したものである。こうした単独の例は、個別の発展の可能性が高い。(i)は古い東の言語と西の言語に共通に見られる語形が残ったものである。八丈島方言では意味も保存したのに対し、白峰方言では独自の意味変化を遂げた。白峰と八丈島という特に離れた地点で共通に見いだせる特徴は、その根が深い可能性がある。

この表で最も問題となるのは、文献に現れない(d)である。この場合、離れた言語島に見いだせる分布をどう評価するかで、解釈が異なる。短母音から長母音の変化は起きにくいという一般性質から、発表者は2地点の偶然の一致を排除し、失われた特徴がそれぞれで保存されたと解釈する。この形容詞語幹の長母音は新潟県や大分県にも比較的まとまって分布するからである。また、(j)も「罵りや眨め」に起源をもつ接尾辞メが、白峰や八丈島で徹底して生き物名に現れる共通性を偶然とは見ない。この語構成はかなり古い時代からあって、二つの方言がそれを受け継いだと考える。

最後に、言語島でみられる諸特徴が、日本語の歴史全体からみて、「古い形」と見なされるか、それとも「独自の変化」と見なされるかという問題に関して、分布の在り方から考え得る基準を提示する。共通する特徴の中身の精査は必要で、今後の課題とするが、ここで取り上げた事例をもとに、蓋然性の高さに関して以下のようにまとめる。

- (1) 1つ以上の言語島および他のまとまった地域でその特徴が見いだされる場合は、言語島の特徴は「古い形」である。
- (2) 3つ以上の言語島でその特徴が見いだされる場合は、それらの言語島の特徴は「独自の変化」であるよりも「古い形」である蓋然性が高い。
- (3) 2つの「言語島」のみでその特徴が見いだされる場合は、それらの言語島の特徴は、「古い形」か「独自の変化」によるものか決定が難しい。
- (4) 1つの「言語島」のみでその特徴が見いだされる場合は、その言語島の特徴は、「古い形」というよりも「独自の変化」である蓋然性が高い。

#### 参考文献

- 岩井隆盛 (1955) 「言語から見た海土の出自」 九学会連合能登調査委員会編『能登—自然・文化・社会—』平凡社、112-120
- 大島一郎 (1984) 「伊豆諸島の方言」『講座方言学 5 関東地方の方言』国書刊行会、235-271
- 小倉学編 (1974) 『全国昔話資料集成 4 白山麓昔話集』岩崎美術社

金田章宏（2006）『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院

柴田武（1988）「日本の言語島（1）（2）」『方言論』平凡社、235-320

新田哲夫（2006）「石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化」平成 16～17  
年度科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号 16520275）報告書

新田哲夫（2007）「日本語諸方言に見られる形容詞語幹の長母音」『金沢大学文学部紀要 言語・文学篇』27: 37-84

馬瀬良雄編（1982）『信州の秘境 秋山郷のことばと暮らし』第一法規

山田達也（1984）「動物名に付く「メ」について一岐阜県揖斐郡の場合一」『名古屋・方言研究会会報』1: 1-6

山内洋一郎（1964）「助動詞ウズについて一連体形終止の異例として一」『広島大学文学部紀要』23-3: 73-96

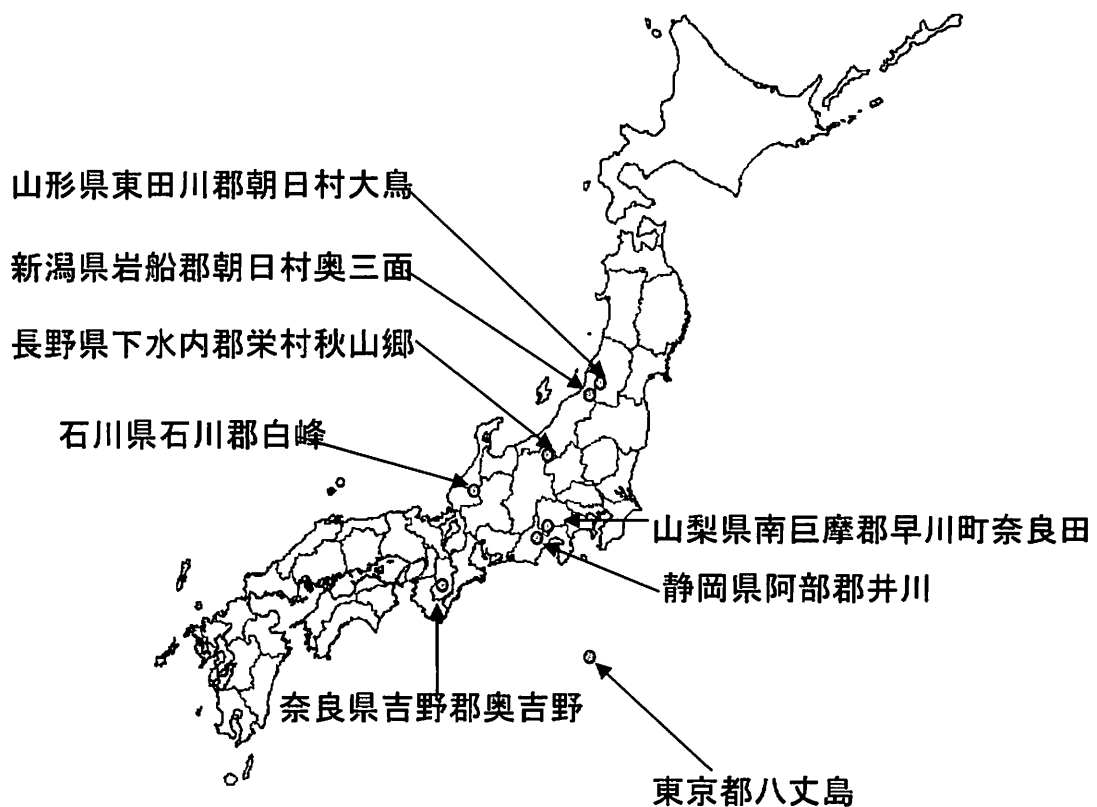


図1 日本本土方言主な言語島